

はしがき

## 新しい「紀要」の時代を求めて

今回のようなセンター年報と学長特別研究費報告書の合本スタイルは今年度のみのものである。一方、時間をかけて検討してきた本学の「紀要」の発行がいよいよ来年度から現実のものとなりそうである。

思えば、「紀要」というもの、大学にとって絶対に必要なものではない。論文を投稿できる学術雑誌は世間に数多くあって、それこそ「無数」と言っても過言ではないほどであるし、また、そういった雑誌のように権威ある専門家による査読を経た論文でない限り、その価値を認めない、という考えは学問の世界ではごく一般的な常識である。ただ学術誌たるもの、査読がおこなわれてさえいれば、それでよし、という訳ではない。査読がおこなわれていても、多くの大学の「紀要」がそうであるように、査読者がその投稿者と同じ大学の教員である場合は、その査読の結果に学外者からみてどの程度、客観的な信頼がおけるか疑問がもたれる。信頼性を担保するために学内で用意周到な準備の上に「きびしい」査読をおこなうわけであるが、それでも個々の投稿者からの激しい反発を招きかねない。学内のつまらない齟齬を避けようとするれば、結果として「あまい」査読をおこなってしまい、その内容は形骸化する。大学の「紀要」が往々にして後者の道を歩み、世間から蔑視の対象になるのは、そのような経緯があるからであろう。多くの大学の研究者が「紀要なんかには載せたくない」と、自分の大学の紀要を密かに軽視していることも隠れた真実である。

それでは、「紀要」の発行はまったく意味がないのであろうか。そうではない、と私は思う。研究実績の報告ばかりではなく、教育活動や社会貢献などを含め、教職員（教員だけではない）の広範な活動記録を掲載していけばよいのだ、と思っている。広辞苑をひもとくと「紀要」は「大学・研究所などで刊行する、研究論文を収載した定期刊行物」となっているが、もともと「紀要」という漢語の意味は、そんなに限定されたものではなかったようである。「私達が何をしているか、かいつまんで皆様に定期的に知って頂こう」くらいの意味であった。それこそ「Acta」であり、「Proceeding」である。

新しい時代に大学の求められる要件としては「自立・自助努力」と「社会貢献」である、とされている。どちらも大学が、国や自治体ばかりではなく、狭くは地域社会広くは世界に向かって自らの姿を公開しアピールして、全力をあげて自らに対する支持を求めていかねばならない。そんな時代には、大学には外に開かれた窓はたくさんあった方がよい。

現在考えている新しいスタイルの「紀要」が、大学・研究所の活動の全体像の概要を外部に定期的に公開する手段と考えれば、大学の情報公開・社会化と地域貢献のために極めて役に立つツールとして再評価されるのではないだろうか。

看護研究交流センター センター長  
研究推進委員会 委員長

吉山直樹